未來

第貳號

二葉會

雨の鹿野宮 奥原碧雲

目次

來れ吾が黨の士　村中月霞
手結の浦紀行　小林吟月
二十五弦　奥原碧雲
雨の鹿苑寺　藏田二葉
彩鳩　ぎむげつ
梟　西水
うた　會
反響　福田紫雲
笛吹松むらさめ

狹霧　小村香雨
わが愛讀詩　白桔梗庵
こぼれ梅　神田如雲等
「教師の妻」に就て　吟月生
城東隱士に湖西隱士　
明星の歌たけを　
告

來れ吾が黨の士

角磐の秀麗を仰ぐ子よ、碧潮の清嵐に浴する子よ、來つて、胸中に滂湃せる正大の氣を吐かずや。今や、趣味の墮落日に甚しく、世を擧げて醜穢なる利慾に走らむとす。吾等、常に社會の木鐸を以て自ら任ずるもの、胸中悶々の情、何ぞ堪ゆむや、吾等、夙に美神の渴仰者を以て任ずるもの、何ぞ万斛の熱涙の湧かざるを得むや、吾が「みちしば」の起るや、實に其動機をこゝに發す。苟も世の風潮を慨し、趣味の墮落を嘆ずるの士は、庶幾くは、速に來つて、吾等が壯擧を輔けよ。謹んで白す。

入會心得

一、本會は、文學の趣味を樂み、新詩國を開拓せむと欲するもの〳〵清契によりて成れり

一、本會には、何人と雖、入會することを得。入會せしものを二葉會々友と稱す。

一、會友には、毎月一回、雜誌「みちしほ」を發行して、配附す

一、「みちしほ」は、最も會友の投稿を歡迎し、各專門家の校閲を經て紙上に揭載す

一、入會を望まる〳〵人は、本誌卷末の「二葉會々則」を熟讀の上、左の宛名を以て、其旨通知せらるべし。

出雲國簸川郡杵築町

二葉會

琦玉文庫

二葉集

第貳號

手結の浦紀行（一節）

中村月霞

潮上の古畫（大島）

大島、は手結諸島中にありては、土に富める島なり、肉厚き島なり、從ひて木多く苔多く、容姿比較的に豐なる島なり、然れども、猶手結式（かりに命名して）に中腹以上をやつされ、角ばりたるむくつけき、脛を容赦なく綠りあやなす波のもなかに沒したるに、毛の生ふる如く、海草藻草むれつき、拳螺、桔梗海盤車　苦螺、海蟾などまで這ひよれるも亦景中のやさしき一詩情あるものとして掬すべし。

巖にやけし風すれ松、罅穴にわだかまり、あるは根上がりに、幹を僻まするなど、痩葉疎影、錯落

と して、一種の雅を帶び、大島神社の小祠、亦此雅中に陰見せるいよいよみる目をよろこばせて、おもはず賞讃の聲を高からしむるものあり。斜風一度、東に起こり、霧をはらんで、此島を輕磨らんか、茫として、更に一段の新趣を增す。

偶みる、潮上こゝに、一幅の古畫をひらくを!!

逆垂千條の鍼

（鰐が口）

傳へに殘る、唐玄宗の夢に見えて、天下の虛妖を祓はんと盟ひきと云ふ、經南山の進士（鐘馗）巨眼長髯、黑衣黑冠を着け、氷刃を提げ、赤裸々たる小鬼をつかんで、逆垂し、凜として氣銀箭を吐く、其概を模せる如き、我鰐が口の戞薛！

海の藍を抜くと二百尺、岩表撓みて、縱にすきまじく千條の鍼を逆垂す。あるものはくれこみて幽谷をなさんとし、或ものは絕巓より直射して脚下の深潭を衝く、飛濤卽、横さまに之を蹴て、泡沫の白を空中に抛つ、滿崖忽然活きて奔らんとす、バルラシアスの葡萄鳥をまねき、雪舟の

鼠猫を誘ひしは、唯是藝術上の點眼其眞を捉へ得たるのみ、而も這般白沫眼晴の神を点じ、眞の眞をして活躍せしむるに至ては、蓋異例の驚嘆たるに價す。

光琳模様

（心中鳴）

僻阪沿崖の一小境界圈中に封鎖され、五拾年の生涯をたゞ涙とたゝかひ、眼中唯々藍を看、口中唯々鹽をふくみ、山に頑迷を鍛ひ、海に放膽を學ぶ底の、赭顏一輩は、無邪氣なるゑみをたゝへ、口角泡をとばして此島の由來を說く、

其壹

昔いづこの漁船にや、大しけの時、流れつきしに、一人の若き漁者ありけり。容貌いたく麗しかりしかば、村に名たかき或家の娘之に懸想せしがもとゝなり、添はれぬ義理のありしより、止みかたなく互に末の末までを契りつゝ、青淵めがけて身を投げしに、あやしや魂魄こりかたまり

、終に浮きて島となりしとぞ。卽小きは女島、大きやかなるは男島なり、故に心中島の名あり。

其　貳

むかしむかし、神だちこゝらあたり、をちこちの津々浦々にすまひ給ひし頃、仇なす海のまがつみありしかば、神いかりて劒を抜き、頭上よりさし貫き給ひしあとなり、かゝればかの島のたゞなかに穴あり、島を徹して海の底にかよへり。卽心中島とは云ひ傳ふ。

と、かゝる荒唐談を耳にし、一葉の扁舟を波にたゞよはせつゝ眼を放ちて海上遙に之を眺むれば、水天碧合するところ、群青、紺青の濃彩相交り相映じ、鳥帽子の如く冠りの如き大小兩箇の島、ポタリと墨をたらし、綾、纐、の如き二三株の松、筆ぶところにくねり、綠青、代赭の染め分けをなし、空色の霞み取りに夕榮ゆる金色をてらして、金泥描きをほのめかせる、形線單簡なるうちに香ひ溢れて見ゆるあるは、さながら是、光琳得意の古代模様のそれよ、

二十五弦

小林吟月

驚に耳そばだつる温泉の槽に春の日ざしのやはらかいかな

春追うて神にはぐれて來し魂の今朝うぐひすと梅に鳴きよる

木草みな花も咲かざれ香もあるなたゞにさびしう朽ちよと說く道

さかしらの世ののゝしりに飽きし靈を濤よみちびけ寥しの國へ　（只下四首稻荻の濱にさまよひて）

煩悶の自然の胸に湧きかへる血潮の音か海のゆふ鳴り

遠海ゆ寂寥よばふ笛の音やわが魂のせていづくへぞ去ぬる

あけぼのの藍濃き潮にならぶ帆や出雲の海を春風ながき（以上）

この涙誰にそゝげの神のみむね湧きてあふれて春の水に似たり

ほゝ笑みの紅梅の蕾にみねし日や君花妻となりしその日や

香をのせて、人酔はしむる香をのせて神の御手よ

り吹くや戀風

今宵こそ神の御手にはふるべけむ太古に似たり森かげの月

うたひては戀ひては地に興つきて夕空とほく星にかへる魂

山越ねて禪師訪ひゆく春のあめちる山吹に袖をしまね

師に添うてたくれかちなる鞍馬路やかざす袂に雲雀の高き

旅一夜春山寺に宿かりて曉つく鐘を僧に請はれし

歌はむにはた夢見むにたまひたる春野にひろき若草の床

偉なる人の足蹟たどらむに脚の弱きをわぶるわが身か

名もあらぬ野の小草すら天職もつかりそめならじ人と生れし身

高き空はかなたに瞻め煩悶は荊棘なしてぞ足にまつはる

つらなるや三千坊の春の灯僧都訪ひゆく路たそがれぬ

柹紅葉焔ともゆる夕ばえに梢さわたる蛇の眼の冴

ね

冬雲の影さびしうもすべりゆく枯野に似たり西行が胸　（西行が傳をよみて）

緋牡舟の蕾ふくらむ朝雨にうまれし稚児の清くうつくし

御園生に孔雀つまよぶ朝ぐもり紅梅のしづくややしげくなりぬ

眼にあまる山三十の雪の夕日緋扇み額にふさふればしま

※　※　※　※　※

※　※　※　※　※

雨の鹿苑寺

奥原碧雲

京都停車場につきしは午後二時、雨細うふり出づ、車をかりて、かねて聞きつる三條小橋萬屋に投宿す、三階の一室に通さる、雨雲低くたれて蒸し暑きことといふばかりなし、一碗の玉露に渇を醫して欄によれば、幾千のいらかは雨にかすみて、東山の翠色滴るが如し。

欄により京の雨みるまひるすぎ　蛇の目の傘の人

ふさはしき。

少婢は宿札の裏面に名所案内をものせるを持ち來りて、遊覽を勸む、東山は既に見つ今日は北野より金閣寺に詣て、明日は嵯峨御室の舊蹟をたつねて、嵐峽館に一日の清遊を誠みんと卽ち金閣寺に向ふ、衣棚通りを北に御苑内に出づ、維新以前は諸親王家をはじめ縉紳の邸宅ありし處、内廓は舊皇居にして、仙洞御所はいつこ、桂宮久邇宮主殿寮出張京都博覽會はかなたなりなど、車夫は車を止めてしきりに興廢のあとを說く。

車とめて昔語るもなつかしや仙洞御所は雨にかすみて

鹿苑寺は、郊外十町の地にあり、樹木蓊鬱として、林泉の幽雅なる、他にその比を見ず、もと西園寺氏の別業なりしが、足利義滿其の幽雅を愛して、退隱の地となし、樓閣をれこして莊麗美觀を極む。寺門を入り、觀覽券を求めて、待つこと少時、番僧の案内によりて堂に上る、「この方丈は延寶中後水尾上皇の御勅營、總体の襖は狩野探幽の筆、扁額は東明心越禪師の筆、鹿苑寺は寺號、通稱は金閣寺、本尊聖觀音は定朝の作、東福門院樣の御念持佛、後水尾天皇の御寄附、右なるは開山夢窓國師、左は開基義滿公法身の像」と立板に水の說法、名工が筆のすさびに室町時代のれもかげを忍び、名匠の鑿の香に尙古の奇僻をみたさんと、佇立低回、稍久しうせる中、かれは既に去りてあらず、はるかあなたに「これなるは陸舟の松と申し天下の名木なり、小襖の繪は住吉法眼廣道の筆、これにて寶物はれしまひ、書院にて薄茶一服」と走るが如く内に入りぬ。一服の薄茶に、清涼一掬、暫し塵世をはなれて、冥想にふければ、

れ茶すみたらば庭園の案内、いざと促されて庭に下り立つ、庭園林泉のたたずまゐ世の常ならず、閑雅幽寂、眞に俗塵を絶つ、雛僧に導かれて、金閣に上る、閣は三層より成り、下層を法水院といふ、正面の三尊は運慶の作、東壇は開山夢窓國師、西壇は開基鹿苑院殿義滿公、何れも稀代の名作と聞きぬ、前面は鏡湖池に臨み、夜泊石、夜啼石、鶴龜島なぞ、布置配合の妙を極め、數百の龜兒岩上に背を晒して、蓬萊島もかくやと忍ばれぬ、

雛僧が鹿苑院殿と高らかに昔語るもなつかしきかな

中層を潮音洞といひ、惠心僧都作の聖觀音を安置す、天井の畫は、狩野正信の筆と稱せらる。上層は究竟窟と題する、後小松天皇の勅額を掲げ、室内一面に金箔を貼付せしが、今は剝脫してそのあとを止めず、欄によりて眺望すれば、西方衣笠山の松樹、雨を帶びて、さながら墨繪の如し

そのかみの行幸のあとやこゝならん雨にかすめる

衣笠の山

閣を下りて北園に入る、林泉巖石の配置また凡ならず。

巖窟より湧出する銀河泉は、義滿公の御茶の水なりきとかや、一掬すれば清冽喉を刺すが如し、龍門瀑、虎溪橋、安民澤(池の名)、貴人榻(石の名)、など流暢なる雛僧が説明にすぎて、夕佳亭に至る、御水尾天皇獻茶御遊の聖跡にして、金森宗和の意匠に成り、萩の遮棚、南天の床柱なぞ有名なり、拱北樓は義滿公居室のあとなり、これて庭園の遊覽終りたれば、繪圖寫眞等を求めて、歸途北野天滿宮に參詣し、薄暮宿にかへる。

雨細う山はけぶれる京の夕欄による子のみな美しき

(明治三十六年八月二十一日日記の一節)

吟月

眉深なる被衣の下ぞのぞかるゝ朱雀大路の春の夜の月

四位殿のさんでの笛の音ごひくきなしの花ちるたそがれの春

長安に人をみわたくる春の夕季伯が詩にあはせやれ琴

彩鳩

藏田二葉

住まはむに猶しもこの子いとけなきいつの咀ひに
宮はわすれし

いつしかと倦みてはこゝにまろび寢のけ寒き夢を
れそふ木枯

うつろなるむくろと知らでおな口惜し人を追ひて
は詩にも泣きにし

あるひと日神のみ袖にふれてよりみちし潮よ珠も
湧くべし（「みちしは」に）

「歡喜」のみことかしこみ彩ばとが春なる光負ひて
下りぬ

梟

吟月

惡魔の囁ぎつたふる風ひやゝけく
ちる露はそく聲ある森の闇に

つきせぬ怨恨をいだくまがつ魂の
ある夜半ふと覺めいでしふくろふの身

呪ふか毒ある聲の木だまさむく
魔軍をあつむる角の響に似て

惡みをひとたび神にかひし日より
飛ぶ空みちびく光明消ねはてては

さらでも迷へる行くへ闇また闇
さびしく弱きわが魂つひにたへぬ
つめたき火焔に似たるわがうらみに
燒かむか光明と幸福と世にあるかぎり
されども眞晝日の神空に高く
み稜威にかがやく眼いかりふくみ
仰がは畏れに消ゆむ小きわが魂
うらみや夜な夜なめぐる月暗き森

西水

何ものゝ大き力のうできてか地球まろびて夜ある晝ある
迷へる子五千万人こゝにありいつかも母の御手に歸らむ

反響

福田紫雲

森かげに寂寞われをれそひ來て反響さながら陰府のみちびき

山の岩に神の秘め事封せられてよなよな振動ふ二千五百年

森ふかく讃美の歌を低う唱へ天なる花の香に醉ひし日や

いつの世かわがこの恨きゆはせむわびてはひとりやみにまろびつ

わびすみの一人の姉のこしかたの似しや花なき露なき冬野

笛吹松

むらさめ

(一)

懸崖高く聳えたる下、こゝに幾千年、寄せてはかへす荒波に削り去られて、恐ろしく鋭き巖、さながら餓狼の牙の如く、頭をもたげたるこゝ一帯の荒磯邊。怒濤常にものすごく哮たけり、逆巻きかへす潮の花白く散りみだれて、見るから心魂を寒からしむ。こゝらなる巖の中にも、殊に恐ろしく削りなされたるが上に、恰もゝのを摑める猛鷲の脚の如く、逞しき根もて、しかと巖にからみつきて、千年の風濤をも、よそ事の如くうち凌げる一もとの老松、その名を笛吹松とぞ呼ぶなる。

笛吹松、如何に美くしき名なるよ。されど、若し今、この松につきてのあはれなる由緒をものがたりなば、そは、いたづらに深き悲哀を喚び起こす、さびしき名とのみ變り果てなむ、いざ讀者よ、樸訥仁に近き浦

人の口によりて、語りつがれたる憐れなる物語聞き給へや。

(二)

そは遠き昔なり。未だその頃は、何心なく、朝な夕なを笹舟流して遊ぶに餘念なかりし海士の子らも、一葉の舟に身を寄せて、鹽辛き世を渡りつくし、いくとせとりし水馴棹うち捨てゝ、寂しき苔の下に永き眠りに就き、その子さへ孫さへ、今はひとしく墓の土となりぬ。げにそは遠き昔なり。さるやんでとなく尊とげなる、うら若き公達一人、さなり、二十を四つ五つは越ぬ給はじと思はるゝが、雲遠き都の空より移り來給ひて、こゝの浦曲の片はとりに住みたまひき。如何なるゆゑよしのたはしたるかは、委しく知る人とてはなかりしが、再び都に歸り給ふことかなふまじき御身の上とこそ聞こゆしか。

何事にも善きと美くしきとに足らはぬ隈なき都に、しかも、世にも時めき給ひし華胄の家柄に生れ給ひし御身の、波風しげきこゝの浦里の長き御詫び住み、如何につらく悲しく思しけむぞ。はじめの程は、ひたすら

柴の戸ぼそを深く閉ぢていとしのびやかに暮らしたまひしが、年月經つにつれ、浦人の朴直なるに、漸く心ゐきなく馴れたまひて、折り〳〵は、徒然の心慰めに、海士の子らをうち集ひて、笑ひ興じ給ふこともありまた波穏やかに、日和よき時は、磯端近く、足を運びたまひて、愁の眉を開き給ふこともあるやうなりぬ。

（三）

ある春の夕ぐれなりき、そゞろ心の浮かるゝままに、彼の君は何げなく庵を出でたまひつ。漸く歩を進めて、磯邊にいたりつき給ひしが、霞に暮るる大海原の美くしさ、みなぎり渡れる春の潮は、深碧濃やかに匂ひて、捲きかへすいささ波、長閑やかに無弦の靈調を奏でて、静かなる夕空の思ひをさそふげなる、彼の君は、心思はず美妙なる自然の高調にふれて、はるけき波間を漕ぎ歸る歌乃に、聞くともなしに耳を澄まし給ふ時しも、静かに眞砂の上を近づき來る足音を聞きたまひつ。

かの君は、何げなくふりかへり見まししがそそそむけ給ひし御顔ばせ

には、深き思ひの動きたまふがありく〳〵と讀まれぬ。

その夕かへり給ひしより、再び御眉には愁ひの雲かゝりがちになりて、折り〳〵は、太き溜息さへ漏らし給ふやうなりぬ。また日ごと日ごと夕暮となれば、いつもかの磯邊に出でて、ひとり深き思ひに沈みつつ、たゞあてもなく彷徨ひたまふが常なりき。

ある夕暮、例の如く磯邊をさして出で給ひしが、こたびは、いと樂しげなる、また落ちつかざるさまして歸りましき。

その夜よりなりき。いと妙なる笛の音の、朗々として、かの老松のほとりに聞え初めしは。

（四）

こゝ七浦に其の名を唱はれて、花の顔ばせかくれなき、村長の一人娘には、美くしき繊人ありとのうわさ。されども、その繊人とはかの君にて、夜な夜な妹待つつれ〴〵を、かの老松のほとりに笛吹き給ふとは、ゆめ知る人もなし。

かくて樂しき月日は、淀みなく過ぎゆきぬ

ある風いたく吹き荒れし夜、またしもかの老松のあたりになづかしの笛の音聞ねぬ。少女は心そゞろに浮かれて彼の處に辿りつきしが、主の影も見ねず。たゞ松が根にかゝりて殘れる笛一管、聲とては、松風の颯々たるあるのみ。笛やそも何をか語る、松やそも何をか悲む。少女は笛を抱きて海に投じぬ。

（五）

今もなほ、波暗く風高き夜でと夜でと、かの老松のあたり、さざんざ吹く風のまにまに、悲しき笛の音の絶ねだねに響くとぞ。あはれなる物語。笛吹松の由緒はすなはちこれ（をはり）

狹霧（鰐山八勝）

小村香雨

飯盛山

笠はねて見あぐる眉もしめりけり霧立ち迷ふ飯盛の山

羅漢橋

二千年凝りてつめたき山の氣に羅漢の橋は苔寂びにけり

般若溪

たり立ちて掬ふ清水の骨に泌みて般若の溪は秋更けにけり

鰐淵瀑

山姫のさらせるきぬか白雲の中よりかゝる鰐淵の瀧

稚子か淵

秋の氣をこゝにあつめてしろかねのみなわさかまく稚子が淵かな

僊掌壇

開山の御堂尊き法の燈にそそろ推古の御代しのはるゝ

三台杉

そそり立つ三もと大杉雲に入りて神代さながら梢吹く風

大悲閣

大悲閣古代さ丹塗り秋寂ひて落葉みたるる入相の鐘

わが愛讀詩

白桔梗庵

きのふをば千とせの前の世とも思ひ御手なは肩にありとも思ふ

運命の嵐、常に情海を吹き荒びて、われや、からくも漕ぎゆく一葉舟の、ともすれば、帆を裂かれ、舵を奪はれむとす。悲しきかな、束の間の歡會、逢瀬を知らぬ別離、泣がむか、涙を許されぬ身なり、叫ばむか、聲を立て得ぬ身なり。滿腔亂れて絲の如き情緒を抱きて窓によれば、暮雲いたづらに迢々、ひとへに幽愁を君ます空に運ぶ、目をつぶつて、悲しき昨夜の夢の跡を辿れば、音容瞭として眼前にあり。されども、嗚呼されども、遠き遠き逢瀬を思へば、一日もなほ千秋の思ひあり、あはれ、如何にして日を暮らさむか、はた夜を明かさむか、むしろ、この身このまま消えて、魂魄永く君があたりに迷はむかな。煩悶悲痛の情を曲盡して、哀音切々、深く胸底を衝くものあり。但し人は、美しき血潮の胸に溢

れたる少女と知らざるべからず。

海棠にねうなくときし紅すてて夕雨みやる瞳よた

ゆき

艶なる人、いかなるもの思ひかはすなるらむ、翠帳深く垂れ籠めて、美しき眉根には常に愁ひの雲かかりがちに、をり〳〵漏らし給ふ吐息さへたゞならず。外には、しとゞと降り暮らしたる春の雨、紅唇漸く綻び初めし海棠も、いとゞ濡れまさりては、うたた愁人の心をいたましむ。珠をのべたるれん指、麗しく染め給ひしとき紅、いと色わろき頬に散りかかる鬢の一すぢだに、かい上ぐるにものうき御身の、何にし給ふとしもなし、たゞ花を肥さむとにや、海棠の根にうちすてて、またしも深きもの思ひに沈み給ふ

わかき子が髪のしづくの草に凝りて蝶とうまれし

こゝ春の國

解げば櫛に流るゝ黒髪五尺、匂ひ濃やかに。薫ずるは何ぞ、梅花の油か。珠を湛ゆる春の水、あたゝかに、清らかなり。靜かに髪をうちひたせ

ば、はらはらと、みだれて、波うちて、水の面は、さながら紫の雲の立ちのぼるかとばかり。ひとふり又一振り、さつと絞り上ぐれば、珠を散らすその雫、もゆる若草にはとばしりて、ばらばらつと、一時に飛び立つ、彩羽まばゆき蝶の幾千、ゆるやかに吹き渡る春風に、舞ひゆきぬ、奇想奇語、燦然として眼を眩せしむ。景情一に神の世のものなり　なか〳〵に、人の世の言葉もて説かむは、愚かのわざなり。

何となく君にまたるゝ心地していでし花野の夕月

夜かな

少女十七、思ひ燃ねては、晝のまぼろし、夜の夢、偲ぶは君のみ、ゆかしき君のみ。一葉のそよぎにも、戀人の聲もやと疑ふいぢらしさ。さるを、こはまた花やかなる夕や、心ゆく野邊の景色や　月は朧なり、いたく影細りて、絲の如し。咲きみてる八千花、目もあやに、わける露さへ匂ひゆかし。迷はざらめや、醉はざらめや、思ひ燃ねたる身の、若き少女の身の。そとぬけ出でし野路に、いくたびが戀人の名を呼びて見ぬ。答はあらざりき。野は。たゞ靜かなる籠の底に眠りて、聞ゆる聲もなし

○げに愛は無私なり、天眞なり、狂ゝ嗤はばわらへ、痴と誹らはそしれ
○這般の情味　世の所謂道學先生の覗ふを許さず
春の夜をちひさく撞きて鐘を下りぬ二十七段堂の
きざはし

夜や靜かなり、深き霞は、ひた〳〵と天地を籠め渡して、世はねしなべて春の眠ゆたかなり。東の山のあたり。ぱつかりと明くなりしは、今し月の出頃か、げに神秘めいたる夜のさまや。今か撞かむの鐘、撞木はとりつ。されども、鯨吼殷々、いたづらにこの濃やかなる天地の夢を驚かさむは本意ならず、ばたまた、この靜かなる春の夜には、ふさはしからざるものを。たゞたゞちひさく、心ばかりつき初めて下りゆく、二十七段堂のきざはし。春の夜、ちひさく撞きて、鐘を下りぬ、二十七段、堂のきざはし、用語の巧妙なるを見るべし。

四條橋ねしろいあつき舞姫のぬかさゝやかに撲つ
夕あられ

妖艶なる厚化粧の人、友禪の振袖ながく、京訛りなまめかしう語らひながら、來かゝりたる四條橋のあたりの夕まぐれ、千鳥鳴く川風さむく、裏雲たむろせる比叡山の一角より、降り來る玉あられ、はら〳〵と、眞白き額を撲てば、あなやとばかりうち翳す袖に、やさしき眉根には、いさゝかのくもりを帶べる、美しともうつくしや。

こぼれ梅

神田如雲

歸去來に興得て鍬とるうまし圃うまし春の日たそがれそめぬ

水をめぐりそぎ立つ峰の雪間より月ほの白く雁なきわたる

飯塚雲水

松原の松の葉でしに鷄鳴きて小春びよりの里のぞ

かなり

大いなる希望の光あふぐ子の二十の春の血よちからあれ

原　鼎

山吹の窓に興ねしミューズの像筆のなかばを春たそがれぬ

揺籃に白梅ひと枝手にしつゝ夢を笑まへる稚児うつくしき

勝松聲

と思へば胡蝶となりて身はかるう春野めぐりて神の御手に來し

長谷川もときち

雪に暮るゝ里路に遠き潮來節唄のあるじの君にも

似たる

人ちさき島國小き詩小きこゝにいくとせ天才をよぶ聲

花川暮潮

春を笑みて小鎌とる野に唄もたのしこゝなるふたり榮を說かぬ子

青戸白虹

蒼海や潮流や地上の王者らの若き力を奪ひけらしな

際涯しらず潮のまゝに風のまに流れて朽ちて信なし浮藻

あるは疾風あるひは怒濤を呼び醒す海や老いせぬ戀の姿か

教師の妻

河井咀華
天野淡翠 共著

東京小石川區原町百三十三番地
教進社發兌
定價五十五錢

河井咀華氏、天野淡翠氏と共に「教師の妻」なる一編を公にす。これ氏が進處女作とも云ふべきか。前後両編に分ち、前者は咀華、後者は淡翠、旭然たる二百六十有餘頁の大冊をなす。通讀の際、聊か感ずる所なきにしもあらざりしも、未だ熟讀の機を得ず、加ふるに、不才われの如きを以て、猥りに批判を下さんは、或は讀者を衍るなきかを恐るるが故に、こは暫く、炬の如き批評眼を有する世の評家に任せ、ここには聊か内容の一端を紹介するに止めん。前篇は袖師が浦、霜枯れ、兄妹、迷ひ雲、意外、闇の中、温泉の宿(上下)、此場の仕儀、友の身、袖時雨、新星なる十二章よりなり、後篇は、團欒野の別れ、仇なさけ、露一時、わづらひ、うたがひ、離縁状、皐月晴、友の情、家庭の花、の十章より成れり。大體の構想を云はば、徳田孝子、松山文次なる青年男女あり。二人は、小學時代より幼馴染なりしが、互に戀ひみ戀はれみ人知れず胸奥の情火を燃し居たり

しに、孝子の東都へ遊學の爲め出發する數日前、思はず袖師が浦のほとりにて邂逅せりと云ふに筆を起こし、章を遂うて、小學教員を奉職せる文次と、女子大學生なる孝子との境遇を叙せり、其間、一は失意の煩悶の絶間なく、一は世の荒き風濤に揺られつつ、二人の精神は益々高潔に趣き、相戀の情は益々切になりゆきしが、終に運命の神は、孝子を深き渦中に投じぬ、素封家を以て鄉黨に知られし孝子が家は、一朝にして破産の不運に陥り、かくて加へて、彼女が唯一の慈愛の網としてたよれる父吉右衛門は、あの世の人となりぬ、彼女は、終に遊學も叶はずなりて、涙ながらに故山に歸臥する身となりつ。然るに、何處までも數奇なる運命は、此間於て彼女の年來の戀人と目出度結婚する機を與へぬ。是に於てか。二人は希望の新星を、更らに彼蒼に仰ぐ身となれり。是より後篇に移り、其後、文次孝子の二人は、ひたすら一人の母に孝養を盡すに餘念なく、靄々たる和氣の中に團欒の樂を恣にせしが、母と孝子とは、切に年來の宿望なる遊學を勸めつ。是に於てか、決然として起ち、再び文次は荒

き世の暗潮に投じぬ。幾多の浮沈、日夜彼の胸中に蟠れる思の母をも失ひつゝ、衷哭の中に吊ひの式も終り、再び上京して苦學の身となりしが、間もなく彼は一命も危き重症に罹りしかば、妻孝子は、出京して、日夜看病に手を盡せり、其甲斐ありて、文次の病も稍々怠りし頃、世の暗影は、彼等二人を陥れ、あはれ離婚の慘劇を演せしめぬ、然れども、疑の雲は忽ち晴れて、文次は高等師範に入學し、孝子は看護婦と身を寳ししが、一陽來復、文次は目出度卒業証書を握る身となれり、然るに他の卒業生ば、奉職の口を捜さんと運動に熱中せる時、こは何事、文次は颯然郷里に歸りて、小學校に身を投じぬ。孝子は宿志の如く、良人を天晴れ立派なる小學校教員に仕立げぬ。間もなく松山校長の名聲は、世にかくれなくなりき。これ一編の大意なり。華麗、筆端彩雲を湧かしむる咀華子の筆と、奔放、大江の朝するか如き淡翠子の筆と、相映發して、燦爛眼を眩せしむる中に　主人公なる孝子の、玲瓏高潔、玉の如き、眞率熱誠、燃ゆるが如き性格は餘蘊なく盡されたり。讀過一番、瞑目して靜かに長き筆の跡を辿れば、天來の妙音の、搖々として胸中に響くものあるが如し。巻頭、天隨學士が序せるが如く、こは著者が青春の理想を歌へるもの、確かに世の紛々たる駄小説と選を異にせるは云ふまでもなし。吾人は、之を家庭の好讀物として、江湖に薦むるに躊躇せざるべし。また特に、世の教育家と、其妻女との一讀せられんことを望むや切なり。裝釘の整美せると、口繪の清新掬すべきとは、また以て書齋を飾るに餘りあり。

（吟月生）

域東隱士に

域東隱士なる匿名を以て、松陽紙上に半可通を振りまわす大先生がある。吾輩、毎度ながら誤名論に接して、先生の學識の該博なる、にイヤサ淺薄なるに閉口奉るものである。頃日も經濟主義と精神主義なる題下にしきりに氣焔を吐いて、どうやう飛火が文壇にもする風、大事にならぬ中に水でもかけぬと劒呑々々。

隱士は大聲喝破して曰く

嗚呼我を以て今の所謂文學者を觀る、其社會を觀ること餘りに

悲觀的なることなきか。今の世は腐敗せり墮落せりと稱すと雖も、所謂文學者の徒が云ふが如くには、決して腐敗墮落せざるなり。

嗚呼我を以て君を觀る、其社會を觀ること、餘りに樂觀的なると呑氣なるとに驚嘆せざるを得んやだ。君は我利々々黨の日々繁殖するのを見ないか、君は教科書事件の醜劣なるを聞かないのか、君は僞善の横行日に甚しいのを知らないのか、君は社會に伏在せる罪惡の、僅かに万一を發くに過ぎない、新聞の日々の記事を見て感ずる所はないのか。

隱士又恣に斷案を下して曰く想ふに彼等の頭腦は極めて主觀的なり、内省的なり思辨的なり、而して彼等の多く友とせる所は、ゲーテ、シルラー、トルストイ等の精神に非ずして、多くは思想發表の感觸にあり、一言にして云はゞ、今の日本の文學者なるものは、多くは智の人學才の人のみ、幸にして外國語を解し得て、西歐諸家の思想を書籍上求めたるの徒多きのみ、嗚呼惑ふこと勿れ天下の善男善女、彼等の筆と口によりて、大に精神上の糧を得べしと。

吾輩の不學なるが爲めか、一讀又一讀、終に其の何の意味なるかを解する事が出來ぬ。然り、詩人文士は悉く主觀的なり、内省的なり、感情的なり、斯くてはじめて詩人文士たるの資格があるのである。主觀的内省的なるが故にはじめて人情の機微を洞察するを得るのである、同情の涙も湧くのである。感情的なるが故に、能く人を動かすことを得るのである。君よ、氷の如く冷かなる頭腦を以て、願る皮相的に、客觀的に、死道德を說く、所謂今日の道學究なるものと、詩人文士（無論眞正のことを混同してはならぬ。又君は、今の文學者を以て、西歐諸家の精神を傳へずして、思想を傳ふるものと云つたが、精神なき思想とは如何なることを云ふのか、思想の發表せらるゝ所には、自ら精神の發表があるではないか。嗚呼惑ふこと勿れ天下の善男善女、彼等の口と筆によりて、大に精神上の糧を得べしと」と云ふに至つては、暴言もまた極れりと謂ふべしである。

次に隱士は、セント、オーガスチンの「懺悔記」を擔ぎ出して、隱士の最も快とするらしき例の衒耀

を初めた。「女郎も買はず、人もナグらす、酒も飲まず底のエチルギー少き消極的人物は畢意するに平凡の徒のみ」此一言は、本論の何れに關係を有するか分からない。或は君が云ふ今日の文學者を云ふものか、若し此の言にして、吾輩が相像する如くんば、隱士は愈々以て、今日の文學者を、悉く消極的道德を說くを以て能事畢れりとなす道學究と同一視してゐるらしい。又隱士は肉慾を盛にやるべしと煽動する樣である。さらでも肉慾を滿足するを以て、畢生の目的とせる徒輩の多き今の世に對して、這般の言を爲すとは、社會を毒する罪決して怨すべからざるものである。又此言を透して、如何に隱士の人格が醜劣であるかが窺はれるやうである。前にそんなに今の世は腐敗も墮落もして居ないと云つたのも點頭かれる次第である。

次に君が人格の偉大なるべきを說いたのは、千萬尤もな次第であるが、今日の文壇には劣等なる人格のみあると、見クビルのは、甚しい謬見である。偉大なる人格を以て社會を感發せしむる底の人は、何處如何なる社會に於ても容易に出るものでない。御言葉はなくとも、今日の文學者は、かゝる偉大なる人格の出現せんことを日夜望んで居ることは、早天に雨を望む樣である。要するに、隱士の如きは、到底門外漢たるを免れない、文學などを議すべき資格はないのである。下らぬ駄文句を陳べて居るよりか、御得意の哲學通でも振りまわして威張つて居る方が增である。

（湖西隱士）

明星の短歌

明星辰歲第壹號に於て眼につきたる短歌。碎雨の白斧には、高遠なる詩趣を歌ひて、神の聲に近きものあり。

その光いまだ地來ぬ星あると知られぬ秀才世にあると好矣

かゞやうなき時と際なき天と觀て撫づれば手裏に事足れる額

鳥飼へば掌にもあさりぬ天地に我なるものの馴るる期しらず

然れども凡作も亦少からざる樣見受けしは僻目か。晶子の京の袖、幽麗なるものは

牡丹とよぶ花にまされる子ならむや繼がよそはふ春の大王

妹とあうむの同車うつくしき伏見の寮の紅梅吹雪

淸楚なるは

湯の宿や霧にとられし朝鏡山にいねしをわびても見たる

松が中の花にぬかよせ耳をふる白の御馬をよしと思ひぬ

等最も誦すべきか。其他清亂の作にては。

さびしみに堪ねぬ夕とものみなよ默座のわれに倒れかかりね

花のなかに死に入孔雀のいぢらしく美くしきでゞ戀は古りにし

の二首最も秀で、殊に「花のなかに」は清亂獨特の譬喩の巧妙なるを見るべし。藍水のにては、

小兎よ友がうれひの夢もるか足らぬなさけを汝れに耻ぢぬる

屋鳴がた母が添寢のとぎがたりをさなき耳になれし船路や

「小兎よ」には、聲調の中、一種の情熱のこもれるを認む。吊彰の

來む世には眼もち日もち涙もち古ろへし思を陳れ孔雀石

暮雨の

犬御手の花がこぼれし一ひらと低う舞ひでしあかね夕雲

等皆誦すべし。

（たけを）

會告

●明治三十六年十二月十五日以後の新入會員左の如し

河井勝三郎　高橋雨窓　小村香雨
矢田豐雄　伊藤正三　桑原長次郎
日野春虹　上野清吉　小林香雲
森山勝三郎　長谷川元吉　藤勝三
上野治造　曾田光十郎　池田房四郎
小倉右藏　和田定右衛門　松浦蒙

和洋服裁縫

謹啓弊店儀今般大に業務擴張する目的を以て最も熟練なる職工數名を雇聘致し洋服、和服、トンビ、コート、マント、シャツ等各最新式裁縫法により迅速且つ丁寧に御調進仕候間何卒倍舊の御愛顧を賜はらん事を伏して奉願候

簸川郡杵築町越峠

小村覺三郎敬白

書籍學校用品一式
並舶來雜貨一式
和漢文具一式
各國流行帽子色々

飯川郡阡築町市場
高等小學校門前
原商店

歐米ノ雜貨和漢ノ文具殊ニ學校用品ハ細大整備セサルナク斬新ノ意匠精良ナル物品ヲ撰ビ最モ低廉ナル價格ヲ以テ購求ニ應スルハ當店ノ聊カ自負スル所ニシテ又以テ店頭當ニ顧客市ヲナサシ好評嘖々タル所以ナリト信ス而シテ多々益々辦スルノ覺悟ナレバ希クハ倍舊ノ愛顧ヲ賜ランコト

▲新荷着▲新荷着

小學校國定教科書
一切新荷着
陸續御注文
被下度候

●大勉強廣告●

中學校教科書一切
內外書籍雜誌取次

文學雜誌 みちしほ發賣所

松合書肆

日本海に臨める
島根縣松江市
學縣下第二會社特約店
內前二

中學校用品一式
並
舶來雜貨一式
和漢文具一式
海軍帽子類色々

島根縣立第三中學校
本門前

荒木商店

歐米ノ雜貨和漢ノ文具殊ニ中學用品ハ細大整備セサルナク嚴新ノ意匠精良ナル物品ヲ撰ビ最モ低廉ナル價格ヲ以テ購求ニ應スルハ當店ノ聊カ自負スル所ニシテ又以テ店頭常ニ顧客市ヲナシ好評嘖々タル所以ナリト信ス而シテ多々益々辨スルノ覺悟ナレバ希クハ倍舊ノ愛顧ヲ賜ラン

二葉會々則

一、本會は文學研究の同志（會友）を以て組織す

二、會友は毎月五日以内に會費として金六錢づつ本會宛送附すべきものとす
但郵券代用を請す
遠隔地會友は別に雜誌郵送料を申し受くることあるべし
數月分を前納するを得

三、會友五名以上紹介したる者は特に會費を徴せず

四、本會は毎月一回（十五日）遞關雜誌『みちしば』を發行して會友に配布す

五、會には短歌、美文、新躰詩、小說、俳句、評論等隨意機關誌に投稿するを得
但取捨の權は編者に與へらるべし

六、會外に於ても秀逸なる寄稿は大に歡迎す

七、原稿は書體明瞭に認め、一行二十二字詰、各篇用紙を異にせらるべし

八、未完の原稿又は文字亂雜なるものは沒書とす

九、投稿〆切期日は前月末日とす

一〇、原稿の選否等本會に對する一切の音信は簸川郡杵築町二葉會宛にせらるべし

一一、本會事務一會友中の數名を以て分擔す

みちしば概則

發行日　毎月一回（十五日）發行

定價　一部金七錢、郵稅貳錢
但松江及び杵築の發賣所よりては郵稅を申し受けず

廣告料　（一頁金四拾錢
（二頁金六拾錢

明治三十七年一月三十日印刷
明治三十七年二月六日發行

島根縣簸川郡杵築町大字杵築東
三百八十七番地ノ二
編輯兼發行者　林吉太郎

島根縣簸川郡杵築町大字杵築南
三百九十三番屋敷
印刷者　福間武次郎

島根縣簸川郡杵築町大字杵築南
三百七十二番屋敷
印刷所　杵築活版所

島根縣松江市末次本町
發賣所　有田書店

島根縣簸川郡杵築町中學校正門前
發賣所　板倉書肆

嶋根縣簸川郡杵築町
發行所　二葉會